

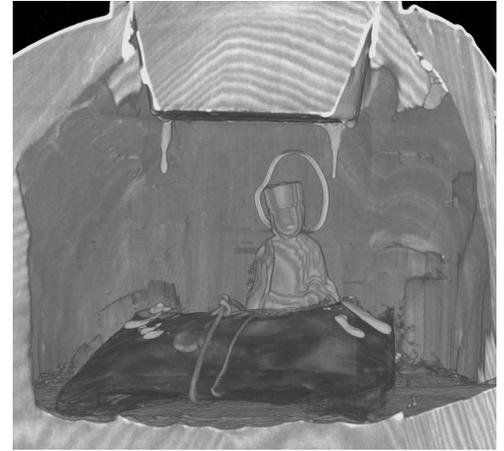
聖徳太子立像内に菩薩半跏像 奈良博の調査で判明 特別展で公開

2021.2.26 10:20 産経WEST | ライフ

聖徳太子が過ごした葦垣宮（あしがきのみや）があったと伝わる成福寺（じょうふくじ）（奈良県斑鳩町）の聖徳太子立像（重要文化財、鎌倉時代）をX線CTスキャンで調査した結果、像内に菩薩半跏（ぼさつはんか）像が納められていることが分かり、奈良国立博物館（奈良市）が発表した。太子立像は聖徳太子の没後1400年の御遠忌（おんき）を記念し同館で開かれる特別展「聖徳太子と法隆寺」（4月27日～6月20日）で展示される。

聖徳太子立像は高さ約84センチの木造で、16歳の太子が父、用明天皇の病気平癒（へいゆ）を願い、仏具の柄香炉（えこうろ）を手に祈る姿とされる。像内胸部に確認された菩薩半跏像は高さ約6・5センチ。右手を頬に近づけ、左足を垂らすなどして岩座に座しているとみられ、同館の担当者は「太子を観音の化身（けしん）とみる信仰がうかがえる」と話す。

特別展では、太子が建立した法隆寺（奈良県斑鳩町）の秘仏で国宝の「聖徳太子および侍者像」（平安時代）など、寺宝を中心に約170件を展示。もとは法隆寺にあり、現在は東京国立博物館が所蔵する国宝の「聖徳太子絵伝」（平安時代）は太子の生涯が描かれた多くの絵伝の中でも現存最古とされ、5月23日まで全10面が一挙に公開される。



聖徳太子立像胸部のCT画像。菩薩半跏像が確認された